

不確定性動機を認める・認めないTAT物語の特徴に 関する研究

Study on the Characteristics of TAT Stories With or Without Uncertainty Motivation

山口県立大学 看護栄養学部看護学科

甲原定房

KOUHARA Sadafusa

Keywords:不確定志向性, 不確定性動機, TAT, テキストマイニング

要約

不確定性動機の有無を判定するために使用されるTATによる物語をテキストマイニングにより分析した。分析の対象としたのは4つのリード文による物語の内、リード文2による物語であった。参加者は82名の大学生であった。結果は以下のことを示している。(1)「探す」「落ち込む」「将来」「どうしよう」といった単語が不確定性動機ありの物語に含まれる。(2)不確定性動機のない物語では「友達」「一人」「男の人」という単語が特徴的であった。(3)リード文2による物語には否定的事象の発生と対処というフレームがある。

Abstract

TAT stories that were used to judge the presence of uncertainty motivation were analyzed by text mining. The stories following lead sentence number 2 were analyzed for this study. The results show that: (1) Words and phrases such as “search,” “depressed,” “future,” and “what should I do” were included in the stories with uncertainty motivation; (2) Stories without uncertainty motivation were characterized by the words “friend,” “alone,” and “man.”; (3) These Stories following lead sentence number 2 were shown to have a framing of the negative event and, a coping response.

目的

本研究の目的はTATによって作成された物語のうち不確定性動機を含む・含まない物語の特徴を明らかにし、典型的な物語を抽出し、不確定志向性判定の簡便な方法を開発するための基礎的な検討を甲原(2022)に引き続き行うことである。

不確定志向性理論(Sorrentino & Short,1986, Sorrentino & Roney, 2000)は、不確定な環境への反応、対処、認知的活動の個人差について検討するための理論である。「どんなときにその個人は認知的活動に動機づけられるのか」という個人の不確定志向性(uncertainty orientation)を判定する方法にはTAT(主題統覚検査)を用いる部分があり、この判定作業には熟練が必要であることから、結果的に本邦での研究の拡がり方が妨げられている。

この問題を解決するためには、より簡便な判定手法の開発が不可欠である。そこで、簡便な判定手法

開発のための基礎的な取り組みとして、本研究ではTATで作成される物語の文章を分析し、特徴を明らかにすることを試みた甲原(2022)の取り組みを継続する。

「不確定志向性」

Sorrentinoら(Sorrentino & Short,1986, Sorrentino & Roney, 2000)が提唱した不確定志向性理論は、個人の不確定な環境への接近のあり方(認知スタイル)によって、私たちが不確定志向性の高い個人(Uncertainty Oriented Person; 以下, UO)と不確定志向性の低い個人つまり確定志向性の高い個人(Certainty Oriented Person; 以下, CO)に分類する。不確定性への志向性が高いUOは、不確定な環境や事象に対して接近し、これを解決することで明快さを達成しようと動機づけられる個人である。一方、不確定性への志向性が低い(確定

性への志向性が高い) COは、不確定な環境や事象に遭遇すると、それまでの認知的な枠組みを維持することで明快さを維持しようと動機づけられる個人である。例えば、それまでの自分に関するイメージと異なる情報に遭遇した場面(テストの結果が予想以上に悪かった。健康診断で予想しなかった項目にチェックが入った)において、この結果に接近し、情報を集め、本当の自分を知ること動機づけられる(例えば、信頼性・妥当性の高い精密検査を受診する)のが不確定志向性の高いUOである。

他方で、不確定志向性の低いCOは自分のイメージや既存の枠組みを維持するために都合の良い情報を探索すること(信頼性・妥当性の低い健康情報に頼る)に動機づけられるだろう。あるいは妥当性の高い情報探索に接近しようとはしなくなると考えられる。

これまでに不確定志向性理論による研究はその提唱者であるSorrentinoらによる広範囲な研究がある(Sorrentino & Roney, 2000を参照されたい)。また、日本及び北米に住む個人が日常的に経験する感情や学業への適応感が、個人の不確定志向性と文化が持つ不確定志向性とのマッチ、ミスマッチによって規定されるとする研究(Sorrentino, Nezlek, Yasunaga, Kouhara, Otubo & Shuper, 2008, Szeto, Sorrentino, Yasunaga, Kouhara & Lin, 2011)や個人の不確定志向性がさまざまな社会的行動を予測するとする研究(Sorrentino, Otsubo, Yasunaga, Nezlek, Kouhara & Shuper, 2005)等がある。また、学会発表等として不確定志向性が保健行動、社会的影響、話し合い活動に及ぼす効果について本邦で研究が進んできた(甲原・安永, 1996, 2002, 2004, 2010, 甲原, 2011, 安永・甲原, 1998)。

しかしながら、上記以外の具体的な研究や実践について本邦では拡がりが見られていない現状がある。この原因として個人の不確定志向性を判定する手法に困難があることが考えられる。

個人の不確定志向性を判定する方法(Sorrentino, Hanna, & Roney, 1992)は、A:不確定性動機(不確定なものへの接近)、とB:明快さ維持動機(二つの要素を合成して判定するものである。ここで前者A:不確定性動機の判定は、TAT「主題統覚検査」を利用して行われる。つまり、調査対象者によって創作された物語の文章を判定することで行われる(詳しくは安永・甲原・大坪, 1997を参照)。

この文章を判定するという作業には、一定の困難さがあるとともに、研究者側にも習熟の必要性があり、このことが研究の拡がりを妨げていると考えられる。TAT判定作業のない、より簡便な判定方法の開発が必要である。例えば、選択肢を用いた方法等が考えられる。しかし、そのためには、実際に調

査対象者によって創作された不確定性動機を含む物語、含まない物語の特徴を明らかにし、典型的な物語を抽出、構成する必要がある。

この典型的な物語とはどのようなものであろうか。これまで安永・甲原・大坪(1997)は、個人によって作成された物語文章をいくつかのパターンに分類することで物語の特徴を明らかにすることを試みている。安永ら(1997)ではTATの方法によって創作された物語をテーマ、登場人物、大まかな話の展開などで分類し、類似したものを統合し、いくつかの典型的な物語パターンを抽出を試みている。しかし、この研究では所謂「目録」によって分類がなされているため、一定の物語の分類は行われているものの、不確定性動機の有無に関わる典型的な物語パターンを十分に抽出しているとは言いがたい。そこで本研究では物語として創作された文章をテキストマイニングし、言葉の「出現頻度」などに注目した分析を行う。

本研究ではこれまでの研究で得られた判定済みの物語文章を利用し、不確定性動機が、ある・ない物語文で出現しやすい形態素(単語)を抽出する。その上でこれらの頻出する語が不確定性動機とどのような関係にあるのかについてコレスポネンス分析、決定木分析の手法を用いて検討することとする。

【方法】

「対象者と物語」

2007年に採集されたTATによる物語を用いる。分析対象とした物語を創作したのは大学生82名であった。

「手続き」

TATによる物語の創作

1つの練習問題と4つのリード文が冊子によって調査対象の大学生に提示された。リード文は以下の通りである。(練習問題)ある人が喫茶店にいます。(リード文1)ふたりの人が、実験室で装置を用いて作業しています。(リード文2)ひとりの人が座って「どうなるのだろうか」と思いにふけています。(リード文3)ひとりの人が机に向かっています。机の上には1台のコンピュータと何冊かの本があります。(リード文4)ひとりの人が交差点(現在は分かれ道と訳している)を思い浮かべながら、考えています。

それぞれのリード文について(1)「誰がいますか」、(2)「何をしていますか」、(3)「この前にどんなことが起きていましたか」、(4)「次にどうなりますか」という4つの質問文に答えながら、物語の作成を依頼した。この4つの質問は約1分間隔で進行した。この物語の作成に引き続き、明快さ維持動機を計測するために「権威主義尺度」(Cherry &

Byrne, 1977) の測定を行った。

なお、これらの手続きを開始する前に採集したデータを使用し論文等で発表すること、この手続きからいつでも抜けて良いこと、抜けたからと言って一切の不利益がないことについて説明を行った上で実施した。

不確定性動機の判定

大学生によって創作された物語については判定経験の豊かな2名の判定者によって判定作業を行った。不確定性動機は「動機あり」「疑わしい」「動機なし」の3つの主カテゴリーに分類され、判定が異なった場合は合議の上で決定を行った。

なお、正統的な不確定性動機判定のための得点化手続きにおいては、主カテゴリーで「不確定性動機あり」と判定された物語について、下位得点の有無判定を行う。ただし、本研究では不確定性動機の有無と物語文の特徴の関係について明らかにすることを目的としているので、下位得点の有無やその結果、つまり不確定性動機の強さの側面については検討しない。

物語の分析

調査対象者によって創作された物語をSPSS text mining for survey version 4.0.1によって形態素(単語)に分解した。これに引き続き単語を出現頻度ごとに順位づけした。Table 1では抽出された単語を出現頻度順に示している。ただし、これは何回使用されたかの延べ数ではなく、語を使用した対象者の人数である。例えば「自分」という語が同一個人の文章で2回以上使用されたとしても1回とカウントされる。したがって、Table 1が示しているのは、不確定性動機ありと判定された物語では6名、不確定性動機なしと判定された物語では26名が、「自分」という単語を使用していたということである。分析を容易にするために出現度数の上位約20位程度にあたる出現頻度(使用した人数)をしきい値として分析を行った。この際、解釈が困難な語、例えば、「ある」「ない」「つく」といった語は削除した。

しきい値以上出現した単語については、不確定性動機のある・ない物語それぞれにおいて特徴的な関係があるか否か検討するためにコレスポネンス分析を行い、付置図を作成した。これは、どのような語が同時に使用されるかを検討する際に有用であると予想される。また、本研究では決定木分析の手法を用い、どのような単語が不確定性動機の有無を弁別する際に有用であるのか、つまりそれぞれの物語に特徴的な単語があるのか否かについても検討する。

【結果】

「不確定性動機の判定」

甲原(2022)では上記の4つのリード文の内、リード文1と4について分析を行っている。本研究ではリード文2による物語について分析を行う。リード文2は「ひとりの人が座って「どうなるのだろうか」と思いにふけています。」である。本研究で分析対象となった物語では、不確定性動機があると判定された物語が14、疑わしいと判定されたものが4、不確定性動機がないと判断されたものが64存在した。不確定性動機の存在が疑わしいと判定された物語について本研究では分析を行わない。

「不確定性動機ありの物語に頻出する単語」

分析する単語の出現のしきい値を3個以上とした(これは3回以上使用されているのではなく、使用した調査対象者が3名以上いるという意味である)。

Table 1
頻出している単語

	不確定性動機あり (しきい値3)	使用 数し た	不確定性動機なし (しきい値8)	使用 数し た
1	考える	8	自分	26
2	自分	6	ベンチ	16
3	探す	5	座る	16
4	行く	5	思う	14
5	ベンチ	5	悩んでいる	14
6	言う	4	考える	13
7	落ち込む	3	公園	12
8	分かる	3	行く	12
9	悩んでいる	3	友達	11
10	少し	3	一人	10
11	将来	3	男の人	10
12	出る	3	仕事	9
13	次	3	無い	9
14	思う	3	ない	8
15	仕事	3	一緒	8
16	座る	3	言う	8
17	公園	3		
18	どうしよう	3		
19	そして	3		

※解釈困難語を削除している

次に単語間の関係を把握するためにコレスポネンス分析による付置図を作成した(Figure 1参照)。

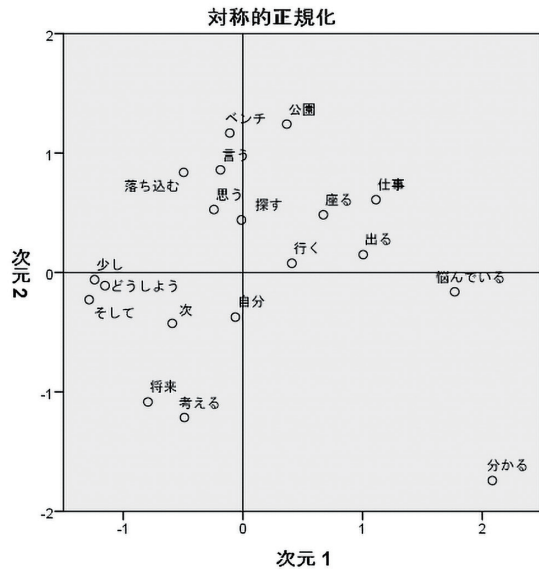


Figure 1 不確定性動機あり物語における単語 (しきい値3以上) のコレスポネンス布置図

「不確定性動機なしの物語に頻出する単語」

出現のしきい値を8個以上とした。以下、図表は不確定性動機あり物語と同様である (Figure 2 参照)。

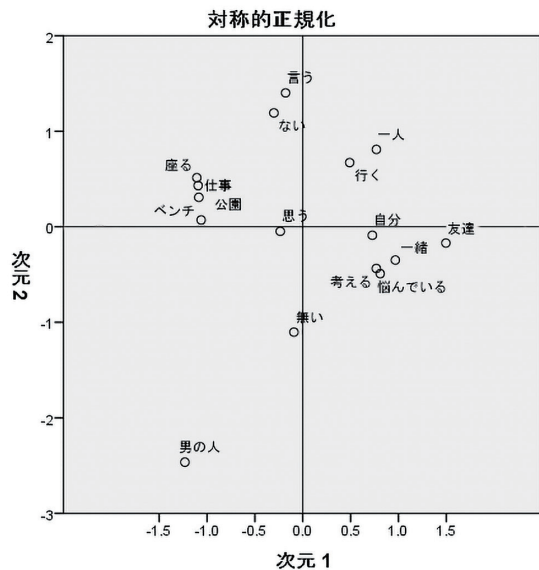


Figure 2 不確定性動機なし物語における単語 (しきい値8以上) のコレスポネンス布置図

「出現頻度の視点からの分析」

リード文2においてどのような語が頻繁に使用されているのかという視点から検討する (Table 1 参照)。例えば度数の高い「考える」「自分」「行く」「ベンチ」「悩んでいる」という単語は不確定性動機の有無にかかわらず出現している。これらの単語は不確定性動機あり・なしの物語双方で重なっ

て使用されており、頻出するものの不確定性動機の存在を指し示す特徴的な単語ではないことがわかる。

次にどちらか一方の物語にのみ頻出する単語について検討する。Table 1, Figure 1及びFigure 2に示される語は、不確定性動機あり・なしの物語で使用頻度の高い単語であるが、実際には不確定性動機あり・なしの物語の内、どちらかにのみ出現し、もう一方にはまったく出現しないということではない。

Table 1の単語を比較すると、不確定性動機ありの物語にのみ「探す」「落ち込む」「分かる」「少し」「将来」「出る」「次」「どうしよう」「そして」ということばが頻出語として出現する。また不確定性動機なしの物語にのみ「友達」「一人」「男の人」「無い(ない)」「一緒」といった単語が頻出している。

これらの単語について不確定性動機あり・なしの物語の中でコレスポネンス分析を行った結果の付置図がFigure 1及びFigure 2である。

不確定性動機あり・なしの物語、いずれにおいても満遍なく単語が登場していることがわかる。一方で「ベンチ」「公園」「思う」「座る」「仕事」という単語が比較的近くに集まっている。このことはリード文2から創作される物語の典型として、仕事上の否定的な事象 (例えば失敗や解雇) といったことについて、公園のベンチで悩む物語があることが示唆される。

これに加えて、不確定性動機あり物語では「どうしよう」「次」「将来」という不確定性動機あり物語の頻出単語が比較的近くに現れる。この点、不確定性動機なし物語では「将来」「どうしよう」といった対応を検討するような単語はしきい値以下の数しか出現しない。これらの単語について、どのように使用されているのかは、以下の決定木の分析の後に改めて検討したい。

「決定木分析」

不確定性動機の有無を目的変数として、特定の単語の使用の有無によって決定木分析を試みる。本研究ではSPSS Modeller ver.14.1を使用する。ここで、例えば、Chaid法は χ^2 検定を弁別の基本に置いている。つまり、不確定性動機の有無という変数と、ある単語の有無という変数の間に、何らかの関連性があるのかを検定することになる。後に示すFigure 3およびFigure 4の決定木は、多重のクロス集計表分析の一種であるとも考えることも出来るだろう。なお、示されたものは統計的に有意なもののみである。観測された不確定性動機の有無が、ある単語の有無によってのみ、完全に予測されるというようなことはないと考えられるが、図示された統計的に有意な結果によって、どのような単語が不確定性

動機の有無に関係しているのかを示すことが出来るだろう。

決定木分析に先立ち、不確定性動機があると判定された物語文とないと判定された物語文を一つのファイルに統合し、しきい値3で改めてテキストマイニングを行ったデータを決定木分析に用いた。目的変数は不確定性動機のある・なしである。

Figure 3の決定木は、不確定性動機あり&なし物語について不確定性動機の有無を目的変数としてChaid法で決定木を描いたものである。また、Figure 4の決定木はC5.0法によって決定木を描いたものである。

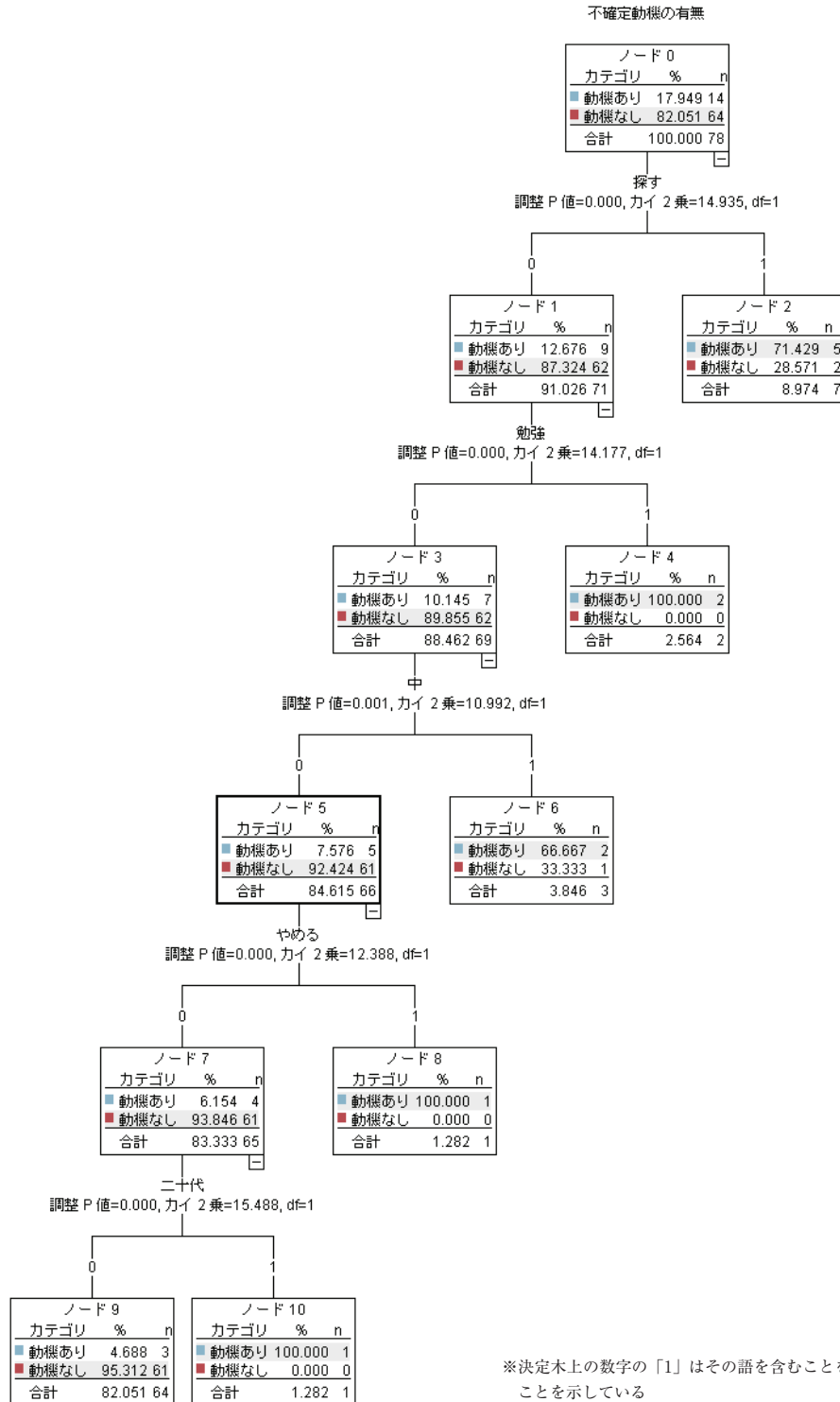


Figure 3 不確定性動機の有無に関する決定木 (Chaid 法)

Chaid法によって描かれた決定木では、第一の分岐点として「探す」という単語の有無により、統計的に有意な水準で不確定性動機を含む・含まない物語を弁別出来ることを示している。具体的には「探す」という単語を含んでいると不確定性動機を含む物語が多く、含まなければ、不確定性動機を認めない物語が多いということが決定木から示されている。

次に上記の「探す」を含まない物語について「勉強」を含んだ物語は2ケースしかないものの、いずれも不確定性動機が認められる。

その上で引き続き、「中」「やめる」「二十代」という単語を含むケースにおいて不確定性動機を認めることが出来ることが示されている。

見方を変えれば、「探す」「勉強」「中」「やめる」「二十代」という単語が含まれなければ、不確定性動機を含まない物語であることが期待できる。

以下のTable 2にChaid法による決定木で見いだ

された弁別のルールによって、実際の物語はどの程度正しく弁別が可能であるのかを示している。

Table 2
決定木 (Chaid法) のルールによる
不確定性動機の有無についての予測

不確定性動機の有無	不確定性動機ありと 予測されるケース	不確定性動機なしと 予測されるケース	
不確定性動機あり	11	3	14
不確定性動機なし	3	61	64
$\chi^2=42.58, df=1, p<.01$			

次にC5.0法によって描かれた決定木 (Figure 4) を見ると、「勉強」という単語によって、始めに不確定性動機を含む物語を弁別し、次に「やめる」、「みる」「おじ」という単語による弁別が続く。

ここでもこのルールによって不確定性動機の有無がうまく予測 (判別) 出来るか否かについてTable 3に示す。

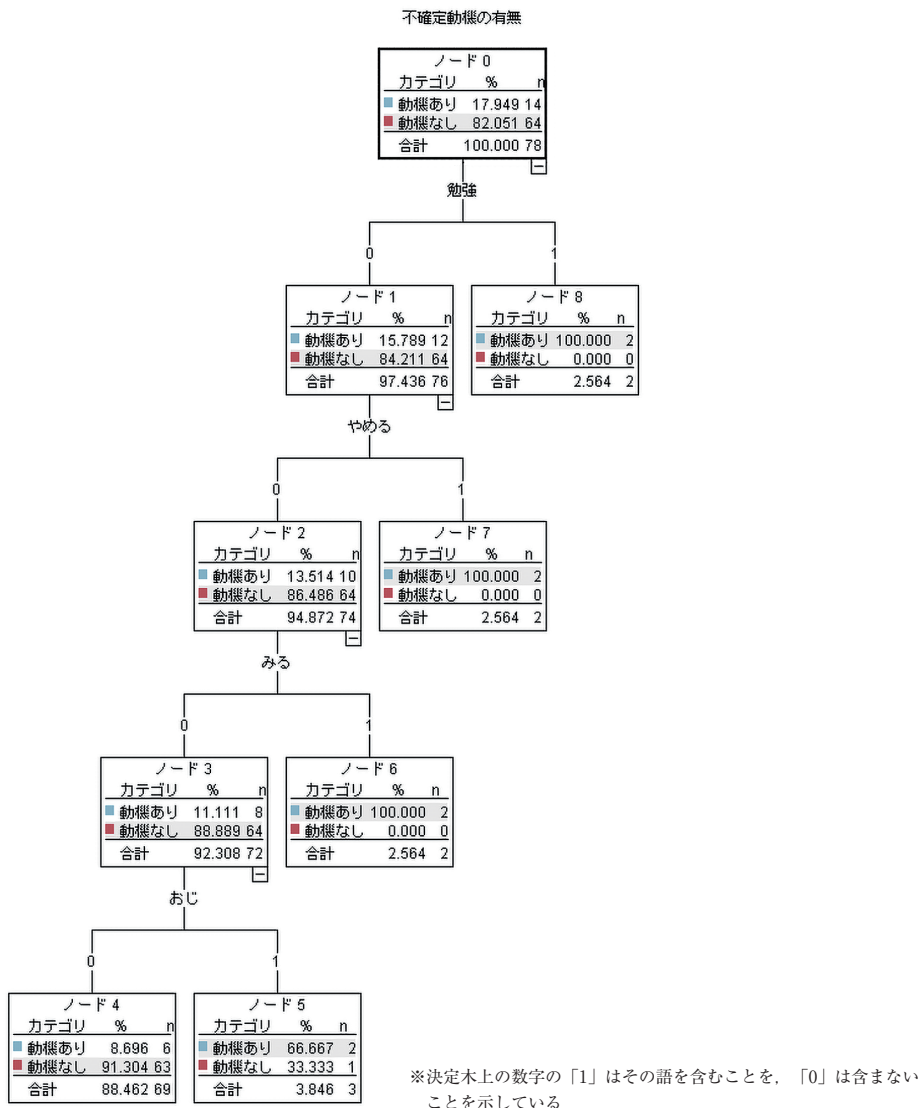


Figure 4 不確定性動機の有無に関する決定木 (C5.0法)

Table 3
決定木 (C5.0) のルールによる
不確定性動機の有無についての予測

不確定性動機の有無	不確定性動機ありと 予測されるケース	不確定性動機なしと 予測されるケース	
不確定性動機あり	8	6	14
不確定性動機なし	1	63	64

$\chi^2=34.77, df=1, p<.01$

2つの手法による決定木からは、Chaid法の方が不確定性動機を含む物語をうまく予測しており、C5.0の手法は不確定性動機を含む物語について誤りは多いものの、不確定性動機を含まない物語については誤った判断は1ケースのみであり、不確定性動機を含まない物語をよりうまく弁別し、予測することが分かる。付録を参照されたい。

「物語の具体例からの検討」

コレスポネンス付置図および決定木の結果を踏まえつつ、その単語が使用されている具体的な物語を参照し、検討する。

「探す」

Chaid法による決定木から、不確定性動機を含む物語の最初の弁別には「探す」という単語が含まれるか否かが用いられている。この「探す」を含む物語は不確定性動機を含む物語が5編、不確定性動機を含まない物語が2編ある。具体例からは不確定性動機を含まない物語では「本」や「書類」といった具体的に形のある「モノ」を探す物語である。一方で不確定性動機を含む物語では職業を失いつつある登場人物が新たな仕事を探すというように、形を持たない対象を探す物語であるという特徴がある。

「友達」

「友達」は不確定性動機を含まない物語に11件と頻出しており、不確定性動機を含む物語ではわずかに1件のみである。意味的に類似した「友人」2件を含めて不確定性動機あり物語では合計3件出現する。不確定性動機あり物語では自分の否定的状況の比較対象としての存在あるいは援助者として登場している。

一方で「友人」が登場する不確定性動機なし物語では10件中6件において、「友人」が主人公、問題の当事者となっていることが特徴的である。不確定性動機あり物語では友人が物語の主人公となることはない。

「勉強」

Figure 3及びFigure 4に示されるように2種類の決定木では、第1あるいは第2の分岐点として「勉強」があげられている。「勉強」という単語が使用された2件の物語はいずれも不確定性動機を認める物語である。創作された物語では、うまくいかない現状や成否の不確実な目的を達成する物語で「勉強」という単語が用いられている。本研究の物語の執筆者はすべて学生である。想定した目標が勉学上の目標であり、目標達成の手段として「勉強」というものを捉えていることが分かる。より年長な人間の行動であろう「根回しをする」「人間関係の地ならしをする」といった物語にはならない。

「落ち込む」

不確定性動機あり物語では3件の使用があり、不確定性動機なし物語では「落ち込む」3件、「落ち込んでいる」が3件認められる。物語の内容から、このリード文2の特徴でもある否定的事象に関する物語である点は共通しているものの、立ち直りがあるか否かが不確定性動機の有無の決め手である。

「20代」

決定木上では1例しか示されていないが、「ベンチ」を含む物語として弁別された物語があるため、実際には不確定性動機を認める2件の物語がある。不確定性動機を含む2つの物語とも、主人公が20歳の男性であるが、一方は恋愛、一方は職場での争いの物語であり、固有の使用法があるとは言えない。

「将来」

「将来」を含む物語は、不確定性動機なしの物語では3件、不確定性動機なしの物語では2件（しきい値8未満なので、図表に登場しない）存在するが、そのいずれもが仕事上のトラブルの物語ではなく、将来への不安の物語であり、内容的に大きな差異はない。しかし、不安を感じている主人公が、現状から一歩踏み出す、あるいは耐え忍んで行動を継続する物語（不確定性動機あり）か、現状のまま大きな変化がない物語（不確定性動機なし）かという違いはある。

「どうしよう」

「どうしよう」は不確定性動機を認める物語として3件あり、内、2件は否定的な結果への恐れ、困惑している内容であり、1件は自分では「どうしようもない」という意味で使用されていた。不確定性動機を認めない物語の1件では対処法が分からないという意味で使用されていた。

この他にも「出来る」「次」という単語が分岐点として現れるが、不確定性動機の有無判別の数が少数となっていることが決定木から示されているので、結果の詳細は割愛する。

【考察】

本研究は甲原（2022）に引き続き、大学生によって創作された4つの物語の内、リード文2「ひとりの人が座って「どうなるのだろうか」と思いにふけています。」による物語をテキストマイニング等の手法を用い分析し、不確定性動機を含む・含まない物語の特徴について検討することを目的としていた。

このリード文2による物語も甲原（2022）で分析したリード文1およびリード文4による物語と同様に出現頻度の高い単語の多くは不確定性動機を含む・含まない物語において重なっていた。ここで、リード文2による不確定性動機あり物語の上位19語の中で「探す」「落ち込む」「分かる」「少し」「将来」「出る」「次」「どうしよう」「そして」といった単語が、不確定性動機を含まない物語にまったく含まれないわけではないものの、出現頻度上位には登場しない。また、不確定性動機を含まない物語の頻出語の中の「友達」「一人」「男の人」「無い」「ない」「一緒」は不確定性動機を含む物語の頻出語とはなっていない。これらの相互に含まれない単語は甲原（2022）でもリード文1や4において頻出語の中の半数ほど存在していた。本研究においても同様の傾向があったことになる。

次に本研究で分析対象としたリード文2による物語の内容について検討する。コレスポネンス分析の付置図からも分かるように頻出単語の分布に明確な特徴があるとは言えないものの、「公園」の「ベンチ」に「仕事」の上での否定的な事象によって「座る」人物が「悩んでいる」という物語が、このリード文2による物語の典型であることが示唆される。物語の例からも解雇や仕事上のトラブルをかかえた人物がどうしようかと悩む物語、将来への不安を内容とする物語が多く存在していた。

このように甲原（2022）におけるコレスポネンス分析の結果と比較して、今回、大きな差異はない。いくつもの単語が満遍なく付置されており、明確な共起関係はないようである。ただし、リード文2による典型的な物語として仕事上のトラブルをかかえた登場人物（ただし、不確定性動機がない場合は友人が頻出する）が、悩んでいる、あるいは将来への不安をかかえて、公園のベンチに座っているという情景は、不確定性動機の有無にかかわらず共通したフレームであろう。その後、登場人物に何も起こらない、登場人物が特に何も取り組まない場合、不確定性動機は認めがたいことになる。一方で何らかの行動を起こす、特に勉強する場合、不確定性動機を認めることが出来るだろう。

したがって、不確定性動機判定の簡易的なテストとして、いくつかの物語内容を示し、個人に選択させるといった方式のものを作成するとして、例え

ば、「公園のベンチに一人の男の人が座って、仕事上のトラブルについて悩んでいる（落ち込んでいる）」あるいは「将来に不安を持っている」という導入から、トラブルや将来への不安への対処行動をとる（不確定性動機あり）、とらない（不確定性動機なし）というフレームが考えられるだろう。また、何らかの目標達成のために「勉強する」（不確定性動機あり）、「何もしない」（不確定性動機なし）という構成も考えることが出来るだろう。このフレームを活かした「物語」を研究者側で製作し、調査対象者に提示し、選好をたずねるという形の選択式の簡易テストもあり得るだろう。

また、完全な選択式ではなくとも、(1)「誰がいますか」、(2)「何をしていますか」、(3)「この前にどんなことが起きていましたか」、(4)「次にどうなりますか」という4つの質問文の内、(1)から(3)の部分で「ある人物が会社を解雇されて、公園のベンチで悩んでいる。」「ある人物が自分の将来について悩んでいる。周囲は打ち込むべきことを見つけ出して、努力しているのに、自分にはやるべきことが見つからないことに悩んでいる」という文章で置き換え、(4)「次にどうなりますか」の部分のみを創作してもらうという方法もあるだろう。自由記述の文章とはなるが、次の仕事や何らかの目標に向かって接近する記述があれば、不確定性動機を認め、記述がなければ不確定動機を認めないという方法となるだろう。

ただし、上記の方法の場合、不確定動機の強さを評定することは出来ない点、注意する必要がある、これまでの正統的な不確定志向性判定システムに少なからぬ影響が出ることになるだろう。

本研究ではリード文2による物語としていくつかの頻出する「単語」を抽出することが出来、この単語や使用例を基本に典型的な物語を抽出することを試みている。ここまでの結果から、上記の「仕事上のトラブルについて公園のベンチで悩む」「将来への不安に悩む」という2つの例が、リード文2による物語の典型であることが出来るだろう。

本研究の対象は100名に及ばず、標本の大きさも小さなものである。決定木などのデータマイニングの手法を用いるにしてもさらに大きなサイズの標本が必要である。そのためには継続したTAT物語創作を繰り返しつつ、今回使用したテキストマイニングの手法を用いた研究を継続する必要がある。特に本研究では決定木の分析を試みているが、不確定性動機あり・なしを弁別する単語を見出す際に有用な手法であった。少なくとも、所謂「目検」では決して発見することの出来ないルールや特徴的な単語を見いだすためには有用であることが判明した。引き続きTATを用いた物語の分析に用いることとし

たい。

物語のような自由な記述による文章から、いくつの特徴的な単語を抽出するという作業は「目検」では出来ないものの、特徴的な「単語」を抽出した後は、その「単語」が、実際にどのような意味や文脈で使われているのか、具体的に物語に戻って検討するという作業がなければ、物語の典型を抽出することが出来ないことも今回の研究で明らかになった。

今後より多くの物語の分析にあたっては、テキストマイニング、決定木などのデータマイニングの手法を活用する部分と元データに戻って丹念に読み込む作業の両方が必要である。

【引用文献】

Cherry, F., & Byrne, D. (1977). Authoritarianism. In T. Blass (Ed.), *Personality variables in social behavior* (pp.109-133). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.

甲原定房 (2011) 話し合いによる判断に不確定志向性の異同が及ぼす効果 協同と教育 第7号 12-21.

甲原定房 (2022) 不確定性動機認める認めないTAT物語の特徴はあるか 山口県立大学学術情報第15号 基盤教育紀要第2号 59-68.

甲原定房・安永 悟 (1996) 不確定性への志向性と被告人の社会的カテゴリーが量刑判断に及ぼす効果 日本心理学会第60回大会発表論文集, 85.

甲原定房・安永 悟 (2002) 不確定志向性と社会的影響 久留米大学大学院心理学研究科紀要第1号 91-100.

甲原定房・安永 悟 (2004) 防護動機づけと不確定志向性が保健行動に及ぼす効果 日本グループ・ダイナミクス学会 第61回大会発表論文集,250-251.

甲原定房・安永 悟 (2010) 不確定志向性と少数者の行動スタイルが直接・間接影響に及ぼす効果 山口県立大学共通教育機構紀要創刊号 29-42.

Sorrentino, R.M., Hanna, S.E., & Roney, C.J.R. (1992). A manual for scoring need for uncertainty., In C.P. Smith (Ed.) *Motivation and personality: Handbook & thematic content analysis*. New York: Cambridge University Press, Pp.428-439.

Sorrentino, R.M., Nezlek, J.B., Yasunaga, S., Kouhara, S., Otsubo, Y. and Shuper, P.(2008)

Uncertainty orientation and affective experience. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 39,129-146.

Sorrentino, R.M., Otsubo, Y., Yasunaga, S., Nezlek, J., Kouhara, S. and Shuper, P.(2005) Uncertainty orientation and social behavior: individual difference within and across cultures. In Sorrentino, R.M., Cohen, D., Olson, J.M. and Zanna, M.P. (Eds.) *Culture and Social Behavior. The Ontario Symposium* 10,181-206. Lawrence Erlbaum Associates Publishers, Mahwah, New Jersey.

Sorrentino, R.M., & Roney C.J.R (2000) The uncertain mind: Individual differences in facing the unknown. *Psychology press, Taylor & Francis, Philadelphia*, PA.

Sorrentino, R.M., & Short, J.C.(1986) Uncertainty, motivation, and cognition. In R.M. Sorrentino & E.T.Higgins (Eds.), *Handbook of motivation and cognition: Foundation of social behavior*(Vol.1; pp.379-403). Guilford Press. New York.

Szeto, C.H., Sorrentino,R.M., Yasunaga,S., Kouhara, S. and Lin, L.(2011) Motivation and performance: Uncertainty regulation in Canada and Japan. *Motivation and Emotion*. 35, 338-350.

安永 悟・甲原定房 (1994) 不確定性への志向性 - その測定法と妥当性の検討 - 久留米大学文学部紀要人間科学編 第5・6号35-45.

安永 悟・甲原定房・大坪靖直 (1997) 不確定志向動機の判定規準とその典型事例 久留米大学文学部紀要 人間科学編第11号89-105.

安永 悟・甲原定房 (2002) 不確定志向性と社会的影響 久留米大学大学院心理学研究科紀要 第1号 91-100.

安永 悟・甲原定房 (1998) 不確定性への志向性は量刑判断の合議に影響するか 日本心理学会第62回大会発表論文集, 110.

【付録】

「探す」を含む動機ありの物語

(例1) あまり人通りの多くない道の近くの公園のベンチに腰掛けていたよれたスーツを着ている中年のおじさん。落ち込んでいる様子。会社でリストラに会った。された。(大仕事で賭けに出たが失敗して)、これからどうなるんだろう…。家族が8人もいるのに…。再就職先を早く見つけないと…。そのまま立ち上がり就職先を探しにハローワークへ行った。が、中々見つからず日が暮れた。次の日、もう1度探しに出かける。

「探す」を含む動機なしの物語

(例2) 家でマンガを読んでいる。漫画の肝心なページが裂けていて続きが読めない。しかもこの本は友達のもので、自分が破ってしまってどうしよう。早く続きが読みたい。どうなるか気になる。友達の漫画を破ってしまってやばい。まるで何事もなかったかのように新しい本(古本屋)で本を探して同じのを買って、続きを読んで友達に返した。

「友人」(友達)を含む動機ありの物語

(例3) 大学4年の男性が自分の将来について考えている。自分は就職の内定が取れないのに、友達は次々に決まってしまった。自分は一人だけ就職できないのではないだろうか。もう悩みたくない。就職活動を続けていくが決まらず、次の年にやっとの思いで職につく。

「友達」を含む動機なしの物語

(例4) 高校の時の友達が進路の事で悩んでいる。その時の少し前に、様々な話を聞いたから。力になりたい。自分も自分の進路について考える。一緒に悩み、一緒に家に帰った。

「勉強」を含む動機ありの物語

(例5) 同じ看護学科の友人。実習で上手いかず将来について考えている。実習で上手いかない事があり、落ち込んで将来に対する不安を感じてしまい、こうなった。患者さんの気持ちを考えている。そして少しでも理解できるようになりたいと感じている。勉強した事を活かしたいと思っている。もう1人看護学科の友人が来て相談に乗ってくれ励ましてくれる。その人はもっと勉強に頑張り次の実習に備える。

「落ち込む」を含む動機ありの物語

(例1) 及び (例5) が該当する

「落ち込む」を含む動機なしの物語

(例6) 女の人が1人で真っ暗な部屋に座り込んでいる。その人が大切な人に冷たくされて、ひどく落ち込んでいる。私はこれからどうすればいいのか、悲しいのと喪失感にあふれている。そのまま眠って朝が来る。

「20代」を含む動機ありの物語(「ベンチ」を含んでいる)

(例7) 公園のベンチに、20代の男が座っている。深く腰をかけ、天を仰ぎ、顔を手で覆っている。深いため息を、先程から、何度もついている。バイト先の店長と言いいいになり、「もう辞めてやる」と捨て台詞を吐いてきた。腹が立ったため、やめると言ったが、一人暮らし(貧乏)をしているため、やめると生活費に困る。謝ろうか、次探そうか、とても悩んでいる。次探すとと言っても20代後半フリーターのため、今のバイトよりいい条件の仕事はなさそうと思いなおし勇気を振り絞り、謝りに行く。

「どうしよう」を含む動機ありの物語(「20代」を含む)

(例8) 20代後半の男。今から彼女にプロポーズしようとしている。色々なセリフを考え中。プロポーズしようとしている。待ち合わせの時間より少し早く来た。上手く言えるのか、でも何て言うべきなのか、OKしてくれるだろうか、ダメって言われたらどうしよう。色々考えているうちに彼女が来た!ととりあえず緊張を隠せないまま…どっか行こうか…喫茶店とか行く。

「どうしよう」を含む動機なしの物語

(例9) 誰かのお父さん。もうすぐ子どもが生まれそう!!お母さんが頑張っている最中。突然生まれそうになって、大急ぎで病院に連れてきたのは良いがとても落ち着けない様子。どうしようどうしよう!! 2人とも頑張れ!!無事に生まれてきてくれ! 元気な産声が聞こえ、お父さんはその場に崩れ落ちる。嬉し泣き。